人の少尉が殘つて恰も眼眩せるが如くして、短銃を手に持ちながら、しかもなほ双眼鏡を眼にあてゝ立つて居た。忽ち佛蘭西の塹壕からひゝく一發の銃聲、それと同時にかの少尉の姿は消えた。あはれ勇敢なるプロシアの近衛歩兵は此の如くにして雄雄しくも全滅の悲運に逢つたのである。

* * * * * * * *

次に掲ぐる諸例は日露戰爭に從軍した諸勇士の功績を「忠勇美談」といふ書から拔萃したものである。これは世に普く知れた事實ではあるが前記の歐洲諸勇士の功績と比較參考するに便利であらう。

一　身を挺して部下を救ふ

歩兵第三聯隊第四中隊歩兵曹長　黑田孝三郎

三十七年八月二十日旅順水師營南方高地の攻擊に際し黑田曹長は決死の壬千數名と鐵條網切斷の任に赴く。時に敵の機關砲は齊射を以て猛烈なる彈雨を集注し、爲に死傷相踵ぎ鐵條網の線に達せし比ほひ續く者僅に五人、漸くにして切斷の任を終へ、其の將に歸らんとし部下を檢しつゝある時、會〻我が一卒の今や敵に拉し去られんとするを發見せしかば、曹長驀然進んで敵を搏たんとせしに、敵は其の勢に恐れたりけん、遂に兵卒を棄てゝ逃る。歸來之を報告するや、聯隊長其の名譽を錄し壯として之を勞ふ。

二　部下を搜索して敵壕内に至る

工兵第十大隊工兵軍曹　的場虎太

的場軍曹は岡山縣邑久郡長濱村の人にして能く部下を愛す。奉天附近會戰の際、萬寶山敵壘前鐵條網を破壞するに方り、第二梯隊の破壞班を率ゐて突進し、他の破壞班と共に目的を達して歸來し、其の人員を檢するに及び、自己の部下にして他班に屬して破壞作業に從事せし八木半次郎と云ふ者の在らざるを見るや、喪心友情に切なる軍曹は自ら進んで之が搜索に赴かんとす。衆曰く「今や敵は前面の障害を除かれ我が軍の突擊を恐れて亂射すること愈々加はるが故行くべからず」と、再三之を止むれども肯

さず、切に請ふて死地に赴く。其の狀宛も我が子を失ひたる親の如く、身彈雨の中に在るを忘れ馳驅奔走、遂に八木の重傷を負ふて敵壕内に臥しあるを發見し之を背負ふて歸れり。見る者感歎せざるはなし。

三　喇叭手の模範

歩兵第十八聯隊第二中隊歩兵一等卒　永井芳太郎

永井一等卒は愛知縣寶飯郡赤坂町の人。喇叭手たり。遼陽の會戰中八月三十一日首山堡附近の戰鬪に於て聯隊のシャオヤンズイ東方高地に向ひ突擊の際は、聯隊長の傳令として常に之に隨行し猛烈なる敵の銃、砲火を冒して傳令勤務に服し、克く其の任務を盡せり。此際左上膊に貫通銃創を蒙りしも屈せず益々勇を鼓して前進中、一彈又彼の兩足を貫通し、今や其の四肢自由を失ひ起立する能はざるに至れり。而も敵彈は益雨注し來り、且つ身には數創を負ふも繃帶さへ施す機會だになく苦悶中にも拘らず、聯隊長の下す突擊の令を耳にするや、自ら勇を鼓して喇叭を執り突擊の譜を吹奏することと三四回。更に飛び來る敵彈に又もや臀部を貫通せられしも尙ほ屈せず、益〻吹奏して大に我が軍の志氣を鼓舞し、突擊隊をして機を失せず敵陣に突入せしめたり。

四　重傷を負うて尙ほ武器を放たず

近衛歩兵第一聯隊第十二中隊歩兵上等兵　中村彌三郎

遼陽會戰中、三十七年八月二十六日大西溝の戰鬪に於て、近衛歩兵第一旅團は最も苦戰したり。殊に近衛歩兵第一聯隊第十二隊は旅團の最左翼第一線に在りて一の獨立高地を占領したるが爲に最も苦戰し死傷續出せり。時に中村上等兵は面部貫通銃創を受け頗る重傷なりしかど、單身假繃帶所に赴かんとし後方峪地を通過せるに敵彈雨注し殆ど行進し難し。然も他の傷者は武器を健康者に託し纔に身を以て死地を脫せんとする者あるに拘らず、上等兵は其の重傷を顧みず、苦痛を忍び尙ほ武器を携帶して手より放たず。歩兵第二聯隊の某中隊長此の有樣を見るに堪へず、武器裝具等を該地に殘し置かんことを勸告せしに、上等兵は色を正しくして答へて曰く「武器は軍人の寸時

も離すべからざる重寶なり、縱令死すとも何ぞ此の手より離すべけんや」と、遂に肯せずして假繃帶所に到り、九月三日東新堡野戰病院に於て瞑せり。斯の如く瀕死の重傷に屆せず、尙ほ能く武器を尊重する精神は、以て軍人の模範とすべきなり。

五　模範の兵士

歩兵第四聯隊第一中隊歩兵一等卒　伊藤源次郎

伊藤一等卒は宮城縣桃生郡十五濱村の人なり。三十七年九月歩兵第四聯隊第一大隊の黑英臺西方高地を占領するや、數倍せる敵の逆襲を受け、三方より來る十字砲火と周圍より被る小銃彈との爲め、小隊長靑山中尉先づ倒れ其他の幹部亦多く減じ、戰友は傷を蒙りて附近に呻吟し、彈藥盡きて又如何ともする能はず。此時一等卒は大聲叱咤衆の志氣を振起し射擊軍紀を確實にし、戰友に彈藥の補充を命じて之が缺乏を防ぎ、輕傷者あれば叱咤して尙ほ戰線に就き射擊せしめ、重傷者は直に處置して後退せしめ有利なる戰鬪を持續することを得しめたりき。されば數倍せる敵の逆襲をして遂に我が前面僅に三百米突附近の畑地に躊躇逡巡するの狀に至らしめ、多大の損害を敵に與へたり。幹部死傷せば勇敢なる兵卒を模範とせよとは我が操典の敎示せる所、一等卒の如きは實に模範たるべき勇士にあらずや。一等卒は王富嶺攻擊に際し、復た決死隊に加はり鐵條網を破れり。

六　沈著なる斥候

歩兵第三十一聯隊第八中隊歩兵一等卒　千葉常吉

奉天附近の會戰に於て、千葉一等卒は數倍の敵が村落防禦を爲せる甘官屯の敵情偵察に任せる將校斥候に屬し、常に斥候長の指揮下に在りて機敏なる動作を爲し、遂に敵の歩哨線內に進入して偵察中、敵歩哨を發見し之を捕獲せんとせし際、其の發見する所となり忽ち急射擊を受くるや、一等卒は騷がず又應射せず、伏臥して尙ほ敵の動作を注視するに、忽ち敵約一分隊歩哨線に增加せるを以て、一等卒は更に匍匐迂回して深く敵陣に潛入し、遂に敵の露營地及び兵力竝に防禦工事を偵知し、能く斥候長を補

佐し其の任務を全うせしめたり。嗚呼一等卒の沈著豪膽なる眞に兵卒の模範と爲すに足れり。

七　軍旗を奉護し且つ上官の危救を救ふ

歩兵第三聯隊第十二中隊歩兵一等卒　長塚留吉
同　同　渡邊四郎右衛門
同　同　朝倉市太郎
同　同　森島宇之吉

三十七年五月二十六日南山の攻擊に方り、歩兵第三聯隊第十二中隊は歩兵第一聯隊の一中隊と共に突擊の命を受け、堅固なる敵壘の正面に向ひ突擊を强行す。敵彈雨下、殊に疾風の如き其の機關砲は猛烈に我が進路を掃射し、流石に勇敢なる突擊隊も稍〻逡巡の色見えたり。此時に當り歩兵第一聯隊長は頭部に負傷し、聯隊副官、旗手亦重傷を負ふて起つ能はず、士卒斃るゝもの算なく、死屍殆ど一連の壘をなすに至る。突擊隊の苦戰想ふべし。時に其の附近に在りし第十二中隊一等卒長塚、渡邊、朝倉、森島の四人は、此の狀を見て勇氣更に百倍し、彈雨の間に携帶器具を以て鋭意散兵壕を築造し、直に聯隊旗を此の中に奉護し、次で聯隊長、副官、旗手を此の壕に收容し、以て上官の一時の危急を救へり。四人の勇敢、機智稱するに足れり。

八　敵の負傷者に水を飲ましむ

歩兵第二十九聯隊第四中隊歩兵上等兵　後藤喜重

後藤上等兵は福島縣信夫郡庭坂村の人なり。三十七年八月二十八日第四中隊が孫家寨北方高地を奪取したるとき、敵の遺棄せし傷者數名壕内に呻吟しありしが、我が軍の到るを見て切りに水を請ふて止まず。時恰も炎熱燒くが如く、殊に各兵連日の運動に身體疲勞し、漸く目的の敵陣を奪取したる當時誰か喉渴し舌焦げざる者あらんや、而して屹立せる山頂一滴の濁水だも得難く、朝來藥餌の如く珍重したる一水筒の底近く宿れる湯茶は此時に於て誰か之を他に頒つを快しとするものぞ、況や敵兵に於てをや。然るに上等兵曰く「我は健全なり彼は傷けり、彼も同じく祖國の爲に身を犧牲に供す

るものなり、嗚呼憫むべき哉」と其の貴重なる水筒の湯を彼の傷ける敵に惠與せり。何ぞ其の仁なるや。斯く勇敢にして血あり涙ある上等兵は以て軍人の模範とすべきものなり。

九　斥校の好模範

歩兵第十九聯隊第七中隊上等兵　山田金一郎

三十七年八月十五日第七中隊が東北溝南方高地に出でゝ警戒及び工事に從事するや、毎夜斥候を出して龍眼北方角面堡及八里庄方向に對して敵情の搜索を爲さしむ。當時水師營東方高地及び八里庄附近は晝夜敵兵出沒し、彼我斥候の衝突少なからず。十六日夜九時山田上等兵は二名の兵卒を率ゐて斥候となり八里庄附近の敵情を搜索すべき命を受け、八里庄に向つて前進せしが、途中怪しむべき足音を聞き潛伏して之を覗ふに、果して敵の斥候の來れるものにして敵は未だ我を如らざるもの〻如し。因て之を通過せしめ更に八里庄に向つて前進し、村落内に入りしも一も敵兵を見ず。乃ち更に村落を出でゝ北端小樹林に到るや、林内に於て足、馬糞を踏む、取りて之を見るに餘波暖がなり。由て意へらく「敵の騎兵は毎日晝間此の附近に出沒し夜に入りて去るものならん、而して本日彼の此の地を去りしは斥候の此に來りしより未だ多時を經過せざりしならん」と、此より歸途に就き、途中曩の敵の斥候に遭遇すべきを慮り路を往路と異にし警戒を倍して行進し、遂に夜十一時中隊長の許に歸來し、詳に其の見し所を報告せり。上等兵の動作は大膽沈著にして能く機宜に適し、斥校の好模範となすに足る。昔馬背を檢し古歌を想ひて敵に追及せし武將あり、機智往々にして用ふべし。上等兵は性沈著篤實にして戰鬪に臨んでは勇敢常に衆の儀表となりしが、後八月二十二日盤龍山西舊砲臺の攻擊及び同砲臺守備を經て、九月十五日龍眼北方角面堡攻擊の際、奮戰遂に名譽の戰死を遂げたり。

一〇　歩哨の周到なる監視

後備歩兵第四聯隊第五中隊歩兵一等卒　日波長藏

時は三十七年九月二十七日午前二時、日渡一等卒、齋藤一等卒は邊牛堡子北方高地の松林に於て歩哨として監守せり。風は既に歛り、山河草木皆眠るが如く、萬籟全く絶えて天地寂寥たり。忽ち何處にか颯々として微かに風聲の如き音を耳にせり。音は次第に近接するが如く又一地に止まるが如し。二人は怪みて互に地に伏し暫時之を窺ふ。偶〻樹枝の反撥するが如き音響を聞きたりしかば、確に是れ人爲のものなりと判斷し山腹なる下士哨に急報せり。是に於て下士哨は密に歩哨線に赴援し散開して待つこと少時、突如黑き多數の人影は目前數歩の地に墻屏の如く顯出せしかば、機至れりと忽の間に急射を加へしに、敵は倉皇爲す所を知らず、少しく應射をなしたる後、遂に數名の死屍を遺棄して潰走するに至れり。是れ全く歩哨の周到なる監守と適當なる判斷とに依り、我に十數倍せる多數の敵をして其の目的を果す能はさらしめしのみならず、全く戰ふ能はざらしめたるものなり。

一一　勇敢なる照準手

野戰砲兵第二聯隊第二中隊砲兵上等兵　笠間萬

奉天附近の會戰中、所屬大隊は第十二師團に屬するや、三月三日松樹咀子南方高地に布陣し、長匂附近一帶の高地に據る敵を射擊せり。上等兵は第一砲車の一番砲手として中隊長の翼側に近迫し、其の照準最も正確にして常に射擊修正の資に供せり。此時車頭嶺に在る敵の砲兵は殆と右側面より我を縱射し、或は著發彈を以て陣地内の森林を爆破し或は曳火彈を以て全正面を亂射し、中隊の損傷頗る多し。而も當時友地が企圖する攻擊方面の敵壘を射擊する爲め、特に試射の迅速を要せり。上等兵は此の間に處して最も沈著に、最も正確に照準し、自若として射擊を繼續したりしが、一旦射擊中止の令あるに及び徐ろに負傷の報告を致せり。檢し見れば、右脇部に砲創を受け鮮血淋漓たり。噫上等兵は既に敵の第一發に於て負傷したりしなり、然れども口を緘みて言はざりき。蓋し重任たる一番砲手の缺兵は、如何に砲車内の士氣に關するかを思

ふと共に、其の剛勇、沈著は射擊終結迄克く確實なる照準を持續せしめたるなり。上等兵の人と爲り寡言、沈勇、最も照準法に長じたり。

一二　危險を冒して復命す

歩兵第三十聯隊第四中隊歩兵一等卒　餐田嘉吉

三十七年九月二日黑英臺附近岡崎山の戰鬪の際、篠田一等卒は彈丸雨飛の間に於て中隊長大尉鈴木義夫の重要なる一報告を聯隊長馬場大佐に呈するを得たり。斯くて一等卒の將に歸らんとするや、聯隊副官大尉平尾乙作は一等卒に告げて曰へらく「汝の任務は既に終れり、今歸還するは敵の銃、砲彈の猛烈なるを以て危險なり、暫く休止せよ」と、一時彼を止めんとせしに、一等卒曰く「歸りて復命するにあらずんば其の任全く終れりと謂ふべからず」と、乃ち發して本隊に復歸せり。蓋し傳令の復命たる實に重要なることにして、特に我戰鬪間に於て其の重きを見る。一等卒が聯隊副官の慰諭に關せず、奮然危險を顧みず復命せしが如きは、眞に傳令の模範といふべきなり。

一三　沈勇の歩哨唯眼を以て十數の敵を走らす

歩兵第二十聯隊第六中隊上等兵　平林新吉

平井上等兵は京都府熊野郡神野村の人。時は沙河對陣中、上等兵が蒲草窪の前哨に於て歩哨に服務せる折のことなりき。午前四時頃敵兵十二三名闇に紛れて我に窺ひ寄るものあり。上等兵は豫て小哨長より下されたる「敵の我が鐵條網及び他の副防禦に陷る迄は射擊すべからず」との命令を固く服膺し、直に複哨の一人をして敵襲を報せしむると共に、躬らは敵の益々肉迫し來る前に立ちて泰然として之を監視せしかば、敵は大に我が戰備の盡せるものあらんことを恐れ、遂に箇々に潰走するに至れり。上等兵の大膽にして且つ沈着なる、一指を勞せずして能く敵を退けたるは軍人の模範ですべきものなりと、今橋旅團長より賞詞を給はりたるは洵に故なきにあらず、隊中皆之を嘆賞せざるはなかりき。

一四　己を愛し馬を愛す

輜重兵第十大隊輜重輜卒　青木象之助

青木輜卒はこ庫縣明石郡垂水村の人。性質温厚、篤實にして愛馬心深く、其の馬に對する宛も慈母の赤子に於けるが如く、馬に過失あるも懲戒せず慰撫して之を使馭するを以て、彼に配當せられたる徴發馬は當初咬蹴の癖を有せしも遂に全く温順となり、且つ出征以來既に一年以上に及ぶと雖も外傷は勿論、未だ一度の内患をきへ起しゝことなし。己も亦衛生に注意し未だ一回も疾病休業等のことなく、殊に如何なる困難勞苦に遇ふも温顔もて活潑に動作し、曾て嫌厭疲勞の狀を顯せしことなし。輜卒の如き、亦以て衆の模範となすに足る。

一五　父訓

歩兵第八聯隊第十一中隊歩兵一等卒　松本文藏

松本一等卒は奈良縣宇陀郡御杖村の人なり。三十七年十月十日補充員として第二小隊に編入せらる。時恰も沙河の對陣中にて警戒最も嚴なるを要するときにして、孜々として軍務に勉勵せり。三十八年二月十日父甚吉より一等卒に宛てたる書信の一節は下の如し。

拜啓其後は意外に疎遠致居候處每に無事健全の書面に接し一家一同其書面を見ることに喜悅仕候然しながら常に拙者の氣つかふ所は其許の精神のみに御座候卽ち故鄕を去る時呉々も諭し申候通り軍人たるものは敵に當るものなれば心を故鄕に移すべからず戰地生活は一生涯再び得難き事と思ひ今日滿洲如何に寒くとも敵軍如何に激しくとも尤も精神を堅固にして武器に優る働きあること拙者の望む所に御座候尙其許出征以來數多く慰問し呉るる人有之候が吾子も眞の軍人となりて人に劣らず汚名を世に出さずして滿洲の土地にて屍を晒すは少しも苦しい事は御座なく候得共彼の精神のみ心配致居候と申居候間其許には少しも軍律に違はず　天皇陛下の御厚恩の萬分の一に御報い下され度呉々も御諭し申上候（下略）

一六　烈母の訓戒

歩兵第十三聯隊第三中隊歩兵一等卒　友井熊太郎

一筆申上修貴殿愈〻武運強く御奮闘被遊候御事奉賀候（中略）然るに悴熊太郎事一方ならず御世話に相成候段深く奉謝候悴事生來の愚物にて何も出來ざるものに候へば御馬先の御用に立ち居る事如何と心配致し候間何卒此の上ながら鞭韃指導せられ國家の爲幾分なりとも御用立せ被下度乍恐御願申上候妾とても御國の爲め捧けし事に候間悴の一死は兼て覺悟の上の事にて名譽の死傷は妾に於ても此上なき御奉公と存居り候然るに萬一未練なる事ども致す間敷きかと推念致し常に以紙面勵居候へ共不悲なる者に候へば尚一層御叱責の上何卒御奉公致し候樣御引立被下度深く奉願候

熊太郎母

迫小隊長殿

友井一等卒は熊本縣飽託郡本山村の人なり。斯かる烈女を母とする一等卒の爭で忠勇ならざるべき。擧國一致の戰たるは、此の文を見ても知られるべし。

笑を含んで死地に入る

旅順に第三次閉塞に於て、生死不明となりたる相摸丸の指揮官湯淺少佐は、出發前部下の決死隊員を甲板に集め、沈痛悲壯なる訓示の演說を爲したり。其の要に曰く。本船は是より旅順閉塞の途に就かんとす。本官の任重大なると與に、卿等の任も亦た重しと云ふべし。然れども一人にて獨り功名を專らにせんとするが如き念を去り、全員一體となりて勇敢なる動作を敵前に爲さゞるべからず。世間にては我々閉塞に從事するものを決死隊と呼び、之に從事するものも亦た決死を誇るが如き傾きあり。然れども是れ誤れり、何んとなれば死は決して吾等の絕對的目的にあらず、其の目的は「任務遂行」の四字あるのみなればなり。唯だ徒らに任務を遂行すること能はざれば益なきを以て成るべく任務を遂行し得るまでは各自の生命を全ふし、任務遂行の上は生死孰れとも卿等の隨意たるべし。今回の閉塞に當り若し本官にして死せば山本中尉代は

りて指揮官たるべく山本中尉仆るゝ時は兵曹長之れに代はり、兵曹長死なば一等兵曹全員の指揮を爲すべし。一人にても働らき得る間は、各自の與へられたる任務を充分に全うすべし。卿等果して之を爲し得るかと。是に於て一同は誓つて貴官の命の如くせんと答へ、中には感喜極りて聲を呑んで泣くものありたり。又た湯淺少佐は出發の前日元相摸丸乘組某氏の請に依り左の絶筆を與ふ。

今や死生の事毫も論ずるに足らず從容笑を含んで死地に乘り入り申し候

三十七年四月三十日　湯淺竹次師

（日露戰爭忠烈餘芳）

敵を救へよと宣せ給ふ

海には海軍の封鎖既に固く、陸には攻城軍の包圍全く成りて、今や青島の獨軍は全く袋の中の鼠となつて、哀れ其運命も玆暫くで盡きる事となつて時、我が至仁至慈に在まず　天皇陛下には、青島城内にある敵國の非戰鬪員及び中立國の人々が戰禍に逢はんを御愍察遊ばされて、攻圍軍司令官に向けて「渠等を救ひ得させよ」との有難くも御惠深き御詔を下し賜はつたので、十月十二日青島攻城軍司令官神尾陸軍中將並びに封鎖艦隊司令長官加藤海軍中將は御詔を畏こみ、直に無線電信を以て青島守城軍司令官ワルデック總督に對し聖旨を傳達し、總督の返信を待つて巨細の交渉を開始して、直に渠等に對して充分手厚き手當を施す事になつたのである。

由來文明國を誇稱する歐米諸國の戰役に於ても　陛下の如く人道を尊ぶと同時に祖國の爲に戰ふ敵をも重んじ、斯くまでに禮儀を尊び給へる御通告を下し給へるが如きは、實に其例稀であつて、彼の旅順開城の際と又此度の通告との此二回の敵に對して仁慈に溢れたる御詔を發せられたのは、實に東西の歴史に比類なきものであると云つてよい。

日頃文明國とか開化國とか誇號しながら一度戰となつてからは、敵國とし云へば老幼

を問はず男女を問はず之を虐殺し、剩へ萬國公法を無視して寺院や病院にまで巨彈を浴せ掛けて少しも恥と思はぬ獨帝に比したならば、我國民たるもの鼻の高きこと幾何であらうか。

（第　記　三雜）

將校斥候

「私は甘四日（大正七年八月）の戰前の敵情を探る爲めに特派された將校斥候に隨いて行つた者ですがかうして生きて還つたのは夢のやうです」とかう前置きして〇〇九中隊の石內軍曹は浦潮野戰病院のベットの上で語り出した。軍曹等を率ゐて行つたのは歩兵少尉厚東四郎次といふまだ二十五六歳の若武者であつたが晴々しい其初陣に名もなきポプラの森下に「殘念」の一語を叫んで敢なく殪れたのです。

八月二十二日午前十一時厚東少尉殿以下十九人の兵士を率ゐ敵情並に地形偵察の任務を帶びスバスカの兵營を出で汽車でスワヤイヌ驛にと向ひました。出發に先つて河村中隊長殿は「皆は決して生還を期してはならぬ。皆と顏を合はせるのも之れぎりだ」と染々とした訓戒があり少尉殿は之れに對し「誓つて任務を全うしなければ生きて還りません」と答へました。汽車に搖られて往く間でも死に行くといふよりも大演習にでも行く時のやうな氣がしてなりませんでした。翌日汽車を降りてから愈、敵地近く入つて行くのでした。見渡す限り天に聳えるやうなポプラの處女林で掩はれた細路の下を先頭に二名それから少し離れて隊長其後に私共が殘りの兵を連れて進んで行きました。其時厚東少尉殿は蟲が知らせたものか突然俺が死んだら後で悉しく報告が出來るやう之れを今からお前に預けて置くといひ乍ら秘密地圖を私に渡さうと致しましたがそれを受取るのは何だか戰死を認めるやうで嫌だから「地圖はありますから要りません」と私も一言いひました。進むにつれて益、用心してお互に振返りながら行きますとすぐ後方から來る平素から一番仲良しの船越上等兵が「軍曹殿私も迚も今從は生きて還れないと思ひます、死んだ跡で私の墓に詣つて下さい」と突然言ひます

ので私は急に胸が迫つて「俺とても同じだ、私の墓詣もして呉れ」と言ひ換はしました。こんな風で徒歩で出發後七八里も來たと思ふ頃森の間を流れる綺麗な小川に出ました。其處に敵の使用したらしい飯盒が洗ひはなしで置いてあるのを發見しました。さては敵は近くだなと更に用心して川を渡つて阪路を上らうとする時一時に砲聲と銃聲が聞えましたが敵の姿は皆無見えないので自分を狙つて居るのかどうか分りませぬが其内銃聲が益〻激しくなりましたが尙ほも阪を登つて往かうとすると突如横合の小路から二中隊の田中少尉殿が別の斥候を連れて退却して來ましたが「其方は皆敵です退却」と叫びながら往き過ぎました。此處で我々は森の中に飛込んで樣子を見て居ますと遙か前方から騎兵一二を先頭に立てゝ歩兵がウヨ〳〵密集部隊を作つて此方へ向け進んで來るのを双眼鏡で見ると手に取るやうに見えます。此時隊長殿はモウ此れまでと思つたものか途中から中隊長殿へ地形報告の爲め歸つた二人の卒の外殘り十七名に向ひ「さあ、愈〻最後の戰だ已に銃を貸して呉れ」と兵の銃を取上げて前面から來る敵に向ひ射擊を始めましたが味方が僅二三發放つ間に突然十五六間鼻先の側面に敵の騎兵が現れましたので我々は已むを得ず森から道端へ出て應戰することになりました。此時には前面の敵から發射する機關銃と野砲の彈丸は全く霰のやうに飛んで來ましたが一發が私の彈藥盒に中り一發は左腕に命中しましたので思はず其處に倒れました。其時厚東少尉殿の「殘念だ」といふ聲を確に聞きましたが其後は能く記憶して居ませぬ。氣が付いて見ると舊曆十六七日頃の月が出て居ました。其時田舍では盆踊をやつて居るのだなと思ひました。夫から磁針を探りに態と道の無い森の中を一晩中歩き廻つて翌日正午頃になつて本隊に歸り此顚末を逐一中隊長殿に報告しました。二十名の斥候隊の内生存者は六七人だけです。實にえらい目を見ました。捕虜は少しも無いです、喃う高橋」「ハツさうであります」と顏に繃帶して居る隣の寢臺の高橋二等卒は立上らんばかりにして軍曹の話に裏書を與へた。高橋二等卒は石内軍曹配下の勇士の一人である。

（東京朝日新聞）

大正九年十二月廿五日印刷
大正十年一月五日發行

定價金壹圓

不許複製

著者　市村平
東京市麹町區四番町四番地

發行者　横尾民藏
東京市神田區東紺屋町四十七番地

印刷者　三浦幸三郎
東京市麹町區四番町四番地

發行所　成武堂
振替東京三〇七一三番

終